

閉じられた群衆から開かれた群衆へ ——ギヤスケル作品における 女性たちの群衆体験——

木村 正子

1 はじめに——群衆の定義とギヤスケル作品に見る群衆

本稿はギヤスケル作品における群衆¹の表象について、女性登場人物たちの思考、行動、言動などを手がかりとして考察するものである。なお本稿で扱う群衆の定義・分類については、ギュスターヴ・ル・ボンの『群衆心理』(1895)、ガブリエル・タルドの『世論と群衆』(1901)、エリアス・カネッティの『群衆と権力』(1960)を参照し、ギヤスケル作品の中で描出される群衆を三種類(労働者群衆、二重群衆、公衆)に分類して検証する。

一般的に群衆は大勢の人間が群れ集まった状態だが、近代史および心理学の用語として用いる場合には、多数の人間が一時的にまた偶発的に集まって形成する集団を指す。その特徴として、集団内の人々は共通の関心事に向かって類似の方法で反応し、ル・ボンが指摘するように、「暗示を受けやすく、物事を軽々しく信ずる性質」(46)を持つ。そのため「単独の個人にはあり得ない感情や行為をも、集団なら可能ならしめる」(ル・ボン 61) と思い込み、不満や怒りを共通認識として形成された集団は、過度の暴力行為に乗りやすくなる。

だが、すべての群衆がこの特徴を共有しているわけではない。ル・ボン、タルド、カネッティのいずれも、群衆を一元化するのではなく、さまざまな角度からの分類を試みている。そこで本稿はカネッティによる「閉じられた群衆」と「開かれた群衆」という二分法を大枠として採用し、ギヤスケル作品に描出される群衆の形態、性質、心理状態などを分析し、作品のプロットとの関わりを見ていく。その折に、女性登場人物と群衆との関わり方にギヤスケルの独自性があるのではないかという仮説をもとに、ヴィクトリア朝社会では男性領域に属するとみなされる群衆に対して、ギヤスケル作品の女性たちは傍観者として眺めるのではなく、群衆の変容に寄与する行動を起こすことに注目する。この変容とは、本稿のタイ

トルが示すように、閉じられた群衆から開かれた群衆への変容である。まずカネッティによる分類を見てみよう。

開かれた群衆とは開放性の高い自然発生的な群衆で、増大しやすい反面、崩壊しやすいのに対し、存続に重きを置く閉じられた群衆は、一定の形態を長期間維持することが可能だが、閉鎖的で集団の規範を逸脱する者には厳しい制裁を加える傾向がある (Canetti 4-6)。近代以前の社会ならば、コミュニティ内の人々はみな互いの顔が認識できる間柄にあるため、より閉鎖的で緊密性が高い群衆の形成が可能であった。しかし近代以降は、交通手段と通信手段の発展による人と情報の大量かつ迅速な移動や、工場による大量生産システムの導入などによって、都市の人口流入に拍車をかけた。都市の群衆は匿名性が高く、無機質的な集団になるのは当然の帰結であろう。ジョン・プロッツが1800-50年代のロンドンの特徴として、都市特有の匿名性という不気味さと、公の場での労働者たちによる過激なデモの頻発という二点を挙げているが (1)、都市空間には開かれた群衆が発生する好条件が揃っていた。

しかしながら、ギヤスケル作品に登場する労働者群衆 (マンチェスターの労働者たち) は、上記のような開かれた群衆の類ではない。彼らは組合の統括の下にあり、均質的なメンバーによる組織化された集団である。その中でギヤスケルの関心は、集団内で彼らが非常に閉鎖的で偏狭的な考えを持ち、情動の高まりに乗じて墮落の道を辿る点に向けられる。ところが彼女が提示する対応策は、労働者の意識改革ではなく、逆に彼らの雇用主である資本家の意識を変え、新たな労資関係を構築することで、彼らの群衆化の解消/回避を試みるものだ。換言すると、群衆問題に際し、当事者である労働者たちの自助努力に期待するよりも、彼らが敵とみなす資本家からの歩み寄りに期待する筋書きである。だがその時、資本家の意識改革プロセスで重要な触媒として機能するのが、女性登場人物の言葉や行動である点に本稿は注目しているのである。

なぜここで女性に焦点を当てるのか。この点には説明が必要であろう。ギヤスケル作品の背景となるヴィクトリア朝社会では、公的領域は男性領域、私的領域は女性領域という性別役割分業が常態化していた。都市の群衆は公的領域で発生するため、女性が群衆の渦中に入り込むことは規範の逸脱に他ならず、フィクションにおける群衆論議においても、女性登場人物は蚊帳の外に置かれるのが常套的

であった（要田 142-43）。しかしギヤスケル作品では、男性領域と女性領域との完全な分断は不可能であり、男性領域の出来事は必ず女性領域に影響を及ぼし、逆もまたしかりである。この点は次の男女の二重群衆をめぐる議論で詳述することになるが、男性領域の産物である社会規範や道徳的価値観を改変することが、群衆問題解決の鍵となっていることは否定できない。その意味でも、ギヤスケルの長編第一作『メアリ・バートン』（1848）において、女性登場人物を手掛かりとして群衆への対応策を考察することは、後のギヤスケル作品の検証にも連なる有効な手段と考えられる。

続いて、コミュニティの秩序維持に寄与する『クランフォード』（1851-53）の女性集団アマゾンズについて考察する。前近代的な町クランフォードには中産階級の男性が不在のため、町はアマゾンズの支配下にある。にもかかわらず、彼女たちは社会慣習や規律の中で過去の男性文化を踏襲しているため、生者の女性集団と死者の男性集団との協働によって町が統治される形となっている。このスタイルは、カネッティが文化人類学の体験レポートをもとに検証した男女の二重群衆による統治に類似するものであろう。カネッティによれば、二重群衆は、男性群衆による祭礼（外の行事）と女性群衆による扇動（家の中からの応援）との呼応を通じて、村人たちが結束を固め、男女の協働によって共同体の秩序維持を図るシステムである（63-67）。これをアマゾンズのケースに置き換えるなら、男性群衆による社会統治（コミュニティのルール）と、女性群衆の服従（ルールの遵守）の協働となる。

だが『クランフォード』は過去への憧憬と二重群衆維持を語る物語ではない。この作品は一話完結の短編をシリーズ化したものだが、章を追うごとにアマゾンズが過去への固執を否定し、二重群衆の開放化へ向かうプロットを含有するようになる。その結果、終盤ではアマゾンズが外部との交流を促進し、開かれた群衆への変容を主体的に受け入れ、新しいコミュニティ作りに従事するという流れに発展する。この点から本稿は、アマゾンズによる集団の換骨奪胎プロセスが、社会における女性の役割をあらためて問い直す機会となる点に着目し、女性群衆の開放化と再編成の成果について論じる。

最後に、『妻たちと娘たち』（1864-66）の中で高まる庶民の声、すなわちタルドが定義づける公衆の声について検証したい。タルドによれば、公衆は新聞など

のジャーナリズムを媒介とした情報の共有によって繋がる人々を指すが、この集団は実体を伴うとは限らない(11-16)。タルドは、実際に場を共有する群集と、情報共有で繋がる公衆とを区別し、後者は前者の進化したもの、あるいは上位種とみなすが、公衆は姿が見えない分、その影響力を推し量ることが難しく、それに対する懸念は増大するといえる。

『妻たちと娘たち』においてギヤスケルは、公衆(ここでは選挙民の結束)の気配をいち早く察知する人物として貴族の令嬢を配置し、彼女の目を通して人々の動きを観察する。選挙権を持たない女性が、社会の動きに鈍感な父や兄に代わって情報収集し、また貴族支配の維持のために町衆を懐柔するという筋書きは、公的領域における男性の不備を女性が補填するというギヤスケル作品に特徴的なプロットの範疇にある。

だが貴族による公衆の形成阻止は、ギヤスケルの意に沿う措置なのであろうか。というのも、『メアリ・バートン』と『克蘭フォード』の群衆はいずれも中産階級の視点で描かれており、ギヤスケルは労働者群衆に共感を寄せつつも資本家の存在価値を否定せず、また時代錯誤的なアマゾンズに関しても、中産階級の女性たちの自業自得だと切り捨てることはない。しかし『妻たちと娘たち』では事情が異なる。公衆およびその予備軍はギヤスケルが帰属する中産階級から発生するもので、それを阻止するプロットの有効性を認めるならば、ギヤスケルは伝統的な貴族支配の維持を支持することになる。貴族支配存続と中産階級による逆転という二項対立を背景とし、ギヤスケルがあえて貴族の視点を取り込むことの意味と効果を含めて、彼女の公衆に対する姿勢を問うていく。

2 『メアリ・バートン』における労働者群衆

ギヤスケルは『メアリ・バートン』の「序文」の中で、労働者たちの悲惨な状況に共感し、「声なき人々」(5: 7)²である彼らの思いを代弁することが作品執筆の動機となったと述べている。たとえば労働者たちの怒りについてギヤスケルはこう述べる。資本家の富の蓄積は労働者たちの働きの成果であるにもかかわらず、「仲間」であるはずの資本家はその成果を独占し、彼らに「不当な処置と不親切」を与えた。そのため労働者たちは復讐に駆り立てられているのだと(5: 7)。だがギヤスケルは、労働者たちの主張が100%理にかなっていると考えるはおら

ず、むしろ労働者たちの苦悩を色濃くする理由には、彼ら自身の「運任せの性格」が影響しているのだと指摘する(5:7)。この見解は物語の中でジョン・バートンを始め労働者たちの墮落のプロセスに反映されている。

語り手は、「どんな教育も彼(ジョン)に知恵を与えることはなかった。知恵がないために、愛情ですら本来の効果を活かせず害を及ぼすことが多々ある」と述べ、ジョンのケースは「無学な者たち」、そして労働者一般に置換できると指摘する(5:144)。ここで語り手がとらえる労働者たちの姿は、資本家への復讐の念で繋がった群衆であり、ひたすら破壊行為に乗じる点ではメアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』(1818)に登場する怪物と同類であるとみなしている(5:144)。

ここでの怪物フランケンシュタインへの言及については、ギヤスケルが怪物とヴィクトル・フランケンシュタイン(怪物の創造者)の名前を混同しているという指摘がすでになされている。しかし創造者による責任放棄が怪物の狂暴化を招いたとすれば、当然ヴィクトルの行為も暴力的であると判断できるのではないか。バーバラ・ジョンソンが、ヴィクトルは彼自身と怪物の類似性を否定するにもかかわらず、彼が自分の罪を語る時、おのずとそれは怪物の行為との類似性を彷彿させると述べる(243)ように、シェリーのテキストにおける「怪物」という表現は創造者と創造物双方に該当し、両者には差異がないと解釈できる。

そこで『メアリ・バートン』に立ち返ると、「なぜ我々(中産階級)は彼らをあのようにしてしまったのか」という中産階級の責任を問う言葉に行きつく。とはいえギヤスケルのテキストは、労働者階級を生み出した資本主義社会のシステムを疑問視するのではなく、作品の中に現前する労働者群衆を生み出した環境、すなわち工場主の責任を問うことに限定している。その結果、彼女は群衆の所業をハリー・カーソン殺害事件に収斂し、殺人犯ジョンとハリーの父カーソンの個人的な問題として処理することになった。その中で、ジョンの罪に対する厳罰よりも、復讐の機を狙うカーソンの心を静めることに重点を置くギヤスケルの措置は、ジョンを追い詰めた責任をカーソンに求め、彼にも反省を促すものとなる。そこでカーソンの意識に作用する誘因として、ある場面が効果的に挿入されている。それは、使い走りの少年がすれ違いざまに少女を突き飛ばしてけがをさせた出来事の一部始終を、カーソンが目撃するという場面である。

この出来事には次の二つの解決方法が提示されており、一つは、少女の乳母が少年を警察に突き出すと脅し、怯える少年を見た乳母が「これは効き目がある」(5: 305) と考えること、つまり司法の裁きでジョンに死の恐怖を与えることを示唆する。もう一つは、少女が「この子は自分のしたことがわかっていなかった」(5: 305) と述べて少年を赦すこと、すなわちカーソンがジョンの不明を情状酌量し、彼に赦しを与えることである。後者には、通行人の「小さなレディのおかげで、あの少年は以後もっと慎重に、そして礼儀正しくなるだろう」(5: 305) という言葉が付加され、少女の振る舞いの妥当性と少年の改心への期待を支持するものになっている。

ギヤスケルは後者を選ぶことになるが、その選択には、当の少年だけでなく、それを見るカーソンの救済も含まれる点を看過してはならない。ハリイ殺害は労働者群衆による資本家への報復の一端といえる。さらにその報復として、カーソンがジョンの死刑を望むなら、カーソンも破壊行為に乗じる群衆と同列に並ぶことになる。ギヤスケルの措置は少女の言葉を通して、比喩的に、群衆化した労働者たちおよびカーソンにも「自分のしたことがわかっていなかった」(5: 305) と教示し、復讐の連鎖を断ち切ることが狙いである。その成果は事後談で語られるように、カーソンが「労資間の完全な理解、信頼、愛情」(5: 320) と、双方の「尊敬と愛情の絆」(5: 320) を願い、雇用システムの改善を図ったことに反映されている。

しかしなぜギヤスケルは、労働者たちに共感を寄せながら、彼らの救済を優先しなかったのか。ジル・L・メイタスはこの点について、労働者たちには感情教育が必要だが、彼らの過度の情動を制することは不可能なため、ギヤスケルは、カーソンとジョンの和解という個人レベルでの問題解決に帰着したと述べている(31-32)。確かに、感情のみで行動する群衆に対し理性で説得するのは不可能だとル・ボンも指摘する(63)ように、労働者群衆一般を扱うのはギヤスケルには荷が勝ちすぎるだろう。だがそれよりも、前述のように、ギヤスケルの関心は、労働者たちの群衆化／墮落を誘発した資本家の責任を問うことにあったため、実際にその後始末を引き受けさせることに重点を置いたのではないか。そのため群衆化した他の労働者たちの処遇については放置したままという不十分な形で終わってしまったのである。

しかしながら、ここでギヤスケルが提示したカーソンの意識改革の試み（女性による男性への教示）は、後に作法マニュアル作家のセアラ・エリスが推奨する教育方法に通底することは言及しておくべきであろう。エリスは『心の教育』（1869）の中で、男性による教育は知性を鍛え、女性による教育は道徳心を養うことに資すると主張し（37）、その根拠として、男性は社会に出た時、精神面での訓練が欠落していると、罪に対する意識が希薄になる恐れがあるからだとして述べている（92）。これはジョンとカーソン父子いずれの情動にも該当し、ギヤスケルのテキストはエリスに先駆けて、女性による男性の感情教育を推進するものであったことが、あらためて認識されたわけである。

3 『クランフォード』における二重群衆

次にクランフォードのアマゾンズの考察に移ろう。アマゾンズは中産階級に属する中高年の未婚女性もしくは未亡人たちの集団である。町にはアマゾンズの身分に相当する男性が不在にもかかわらず、彼女たちは「既婚女性は夫の、独身女性は父親の生前の社会的地位」（2: 288）に応じて序列化されている。つまり実体を伴う女性群衆が仮想群衆としての男性群衆に支配されている構図であるが、問題は、この序列に相応する財力がないにもかかわらず、さもあるかのように振る舞う慣習にある。

たとえばアマゾンズの活動の中心をなす相互訪問では、貧乏を隠すことが集団内の暗黙知となっているため、相手の窮状に目をつぶり、「知らないふり」を遊ぶように興じることが求められる。語り手メアリ・スミスが述べるように、「私たち（客）は女主人の事情を知っており、また私たちが知っていることを夫人は知っているし、私たちが知っていることを夫人が知っていることも私たちは知っている」（2: 167）、という具合である。当然ながら、なぜ彼女たちは嘘をついてまでこのような社交活動を続けるのかという疑問が生じる。

まずアマゾンズの振る舞いは、1830年代に隆盛したジェンティリティ文化の名残であるとエリザベス・ラングランドは指摘する。ラングランドの調査によると、当時は男女共に上流社会に相応した振る舞いを身につけて、その振る舞いに応じた社会集団を形成し固定化することが意図されていたという（124-25）。そのため体面の維持が最優先事項となり、中産階級の女性たちにとって「その地位

に見合うよりも低い生活による人格や影響力の喪失」は致命的であった (Banks 62)。貧乏を隠すことは自身を貶めないための方便で、相手の窮状に目をつぶることは社交活動を円滑に進めるための「善意」(2: 165) の証であったといえるだろう。アマゾンズはこれを「貴族的」(2: 166) な振る舞いと解釈し、過去の文化の維持に努めてきたのである。

しかしフェミニズムの視座から見ると、ジェンティリティ文化は女性にとって不利なものだという指摘が多い。アマゾンズのアイデンティティは「不在の男性」に依存しているというマーガレット・ケース・クロスカリの指摘 (208) や、女性は男性文化の「とらわれ人」であり「歴史的産物」に過ぎないというアイリーン・ジルリー (884) の指摘がその一例である。両批評家とも、女性たちが主体性を失い、群衆特有の匿名性の高い集団行動に甘んじる点を批判しているが、その最たる事例が、かつてのリーダーであるデボラ・ジェンキンズによる亡き父の礼賛である。彼女とキャプテン・ブラウンの文学論争は、ジョンソン博士対チャールズ・ディケンズという新旧の作家をめぐる論争の形をとるものの、デボラがジョンソン博士を推奨するのは、「父がそう言ったから」(2: 172) に過ぎない。結局この論争は、鉄道敷設の仕事に関わる近代人ブラウンと、デボラの言葉を通して蘇る死者の群衆との論争に他ならないのである。

しかしながら、デボラの死を機にアマゾンズは大きな変化を経験する。破産したミス・マティが茶の販売を開始するのもその一つだが、その前に、住む家にも困窮するミス・マティを引き取り、世話を申し出た女中のマーサの存在に着目したい。これまでマーサはミス・マティに付随する存在であったが、ミス・マティがマーサ夫妻の庇護下に入るや否や、女主人と召使いの主従関係が完全に逆転することになる。ところがその後も表面上はミス・マティが女主人、マーサが召使いという関係が継続していくのである。これはどういうことだろうか。

この点については、ドリス・ウィリアムズ・エリオットが指摘するように、アマゾンズの社交活動が実は召使いを含めた協働で成立していた (113) という点を踏まえておかねばならない。前述のジェンティリティ文化との関連でいうと、その家のジェンティリティぶりを示すために、召使いを可視化する必要がある。たとえばミセス・フォレスターのお茶会では、女中一人の姿を見て、女中頭も執事もいるかのように仮想する (2: 166-67) のがアマゾンズの礼儀である。同様に、

破産後のミス・マティが従前と同様の体面を維持するなら、「女中マーサ」の姿を見せなくてはならないのだ。

これによって、アマゾンズは死者たる男性群衆の他に、実は召使いたちという別の見えない群衆とも二重群衆を形成していたことが明らかになる。「見えない」というのは、中産階級の女性たちにとって召使いは対等な存在ではないため、認識する必要がなかったという意味である。だがミス・マティへの援助によって、マーサはアマゾンズの仲間入りをし、それに続いて、かつては身分違いゆえ排除されていたミセス・フィツ・アダムの参入も容易になり、アマゾンズは均質的な群衆から一気に開放化へ向かう。その結果この集団は、階級や社会的地位、資産状況、職業などに拘らないハイブリッドな集団へと変容し、最後には行方不明であったミス・マティの弟ピーターの帰還によって、男性の参入をも受け入れるようになる。

この変化について、ミス・マティのジェンティリティを守るための救済策が、ジェンティリティ化によって確立された中産階級の文化（かつてのアマゾンズが典拠としていた階級差や男女の役割分担という社会規範）の解体へ導くことになったのは皮肉だという指摘もある（Kucich 153）。ミス・マティの破産を彼女の個人的な問題として処理せず、彼女を支援するという目的のために、町全体が協働して困窮者を救う体制を整えていったことが、従前の均質的で閉塞的な集団を開放へと導いたのである。しかし、ミス・マティとマーサのように、かつての主従関係をゲームのように継続することは、ジェンティリティ文化を完全否定するのではなく、現前の状況に合わせて既存の文化を仕立て直した成果といえるのではないか。『メアリ・バートン』の労働者群衆とは異なり、アマゾンズは情動による破壊行為で社会を変えようとするのではなく、インフラ整備によって制度を見直すことにした。群衆の開放化を利用して制度の充実化を図るという、ギヤスケル作品の女性たちの工夫であろう。

4 『妻たちと娘たち』におけるタルド的「公衆」

最後に、ギヤスケルの遺作『妻たちと娘たち』において、タルドの定義による公衆がどのように扱われているかを検証する。この作品は1832年の選挙法改正前夜の田舎町を舞台としているが、作品の冒頭ではすでに次のような不安材料が

提示されている。町には教養のある者たちが進歩的な話をすることもあり、また過去にはトーリー党員の伯爵家に対抗してホイッグ党員の名家が出馬することもあったが、現時点では、領地民は伯爵家の長男に一票を投じているというのである（10: 4）。物語中、伯爵家に直接異議申し立てをする選挙民はいないが、目に見えない公衆が与えるインパクトはいかばかりか。ギヤスケルはそれを伯爵令嬢レディ・ハリエットの視点から描き出している。

顕著な例として慈善舞踏会でのレディ・ハリエットの様子を追ってみよう。伯爵家一行は公爵夫人を伴って舞踏会に登場するが、彼らの到着が大幅に遅れただけでなく、公爵夫人の地味なドレスが会場の女性たちの期待を裏切るものとなった。ゴシップ好きのミス・グッドイナフを始め人々は失望と不満を露わにする。それに気づいたレディ・ハリエットは、モリー・ギブソンに伯爵一行の遅刻は選挙で不利になるかと問うが、レディ・ハリエットが最も知りたいことは、貴族が決して耳にすることのない会話、すなわち貴族が同席しないところで、町衆たちが交わす会話の内容である。

レディ・ハリエットの懸念は、舞踏会の出席者の感情がどのような変容を経て社会に波及するかにある。ドレスに関心を持つのは主に女性であろうが、女性たちの不満は家族の会話から友人・知人のネットワークを通じて拡散し、選挙権を持つ男性たちに届くのは時間の問題である。その間に誇張やデマが付加されることも十分想定される。だが、彼女以外の伯爵家の人々はそのことに全く気づいていない。キャサリン・イングリスは「想定されないコミュニティ」（68）という用語で、登場人物が認識して初めて顕在化する集団について指摘しているが、伯爵家の人々にとって、町衆の会話はまさに「想定されないコミュニティ」である。なぜなら、貴族は「崇拜されるのが当然」（10: 5）、庶民は貴族に「従ってあたりまえ」（10: 5）という認識が、今も伯爵家に根付いているからである。しかし「六月の選挙」（10: 240）へ波及効果を念頭に置くレディ・ハリエットは、彼らの懐柔を画策せざるを得ない。

レディ・ハリエットの提案は、伯爵家が町衆の中に入り、場と時間を共有する機会を持つことである。これは貴族と町衆が階級を超えて交流するという点で、群衆の開放化に相似するが、彼女が「私たちの領地民」（10: 240）と表現することから明らかなように、彼女は貴族と町衆が対等な立場で交流すると考えてい

るわけではない。舞踏会では、町衆の期待に応じて「貴族は見せ物である」(10: 240) ことに甘んじるが、それも祭りの余興のごとく一時的な立場の逆転を演じるに過ぎない。ポイントは、この余興が町の人々の溜飲を下げるのに非常に効果的であることを、彼女は経験上熟知していることにある。何しろこの懐柔策は、彼女の母である伯爵夫人からの流れなのである。

伯爵夫人は、伯爵家が設立した実務学校運営の返礼として、年に一度屋敷に町の女性たちを招待して祝祭を催している。招待を受けた女性たちにすれば、この行事は伯爵家から受ける栄誉であり、また日頃の努力に対する承認の印でもある。伯爵夫人は年に一度の厄介事だと割り切って処理するが、この祝祭が貴族と庶民が集う開かれた場となり、ひいては町衆の不満解消の場として寄与してきたのは間違いない。

すると、このレディ・ハリエットの作戦を是とするなら、ギヤスケルは貴族支配の継続に賛同するのか、そして選挙民およびその周囲の人たちを黙らせることを得策だとみなしているのかという点で疑問が生じる。つまりギヤスケルは、自身が帰属する中産階級出身の声を無視するのかという問題である。実際、レディ・ハリエットの視点から中産階級を見ることは、ギヤスケルにとって、自身および中産階級を客体化する作業となる。レディ・ハリエットの目に映る町衆とは、貴族が御しやすい対象であるため、不満分子を早期に摘み取るための懐柔策にレディ・ハリエットは疑いを持っていない。

そこでレディ・ハリエットが一目置くモリー・ギブソンの存在に目を向けてみよう。モリーには、父が町医者という事情もあって、町衆との交流はもちろん、伯爵家以外にも、地元の名家ハムリー家との交流もある。しかも彼女は、相手が伯爵令嬢であれ、自身の判断基準に基づいた率直な物言いを辞さない点で、レディ・ハリエットからは「正直者で有名なお嬢ちゃん」(10: 238) のお墨付きをもらっている。モリーの継母でかつてレディ・ハリエットのガヴァネスであったミセス・ギブソンも、階級を横断する交流網を持つ人物だが、彼女は伯爵家に対する忠誠心を失わない現体制継続派である。この二人の対比から、そして伯爵家の統治を死守しようと努力を惜しまないレディ・ハリエットですら、モリーの意見には耳を傾けるという事実からも、ギヤスケルの姿勢が明らかになるだろう。ギヤスケルは、社会の変化に無頓着な男性の代わりに、現体制を守ろうと努力す

るレディ・ハリエットの行動を否定するわけではない。少なくとも、彼女の介入によって町衆と伯爵家の交流が広がれば、情報網も開放化されることになる。だがレディ・ハリエットがモリーの声、ひいては町の女性たちの声にも耳を傾けるとすれば、ギヤスケルの立場は、モリーを通じて公衆の声を届けることであると解釈できるのではないか。

5 結び

このようにギヤスケル作品における3タイプの群衆を見てきたが、総じてギヤスケル作品には、群衆に対する否定的な立場に立ち、特に閉じられた群衆に対しては開放化を促すプロットが仕込まれている。登場人物たちが互いの顔を認識できる関係を構築するという点では、閉じられた群衆にも一利あるだろうが、緊密で均質な群衆は他者を脅かす／支配する傾向を示すことを、ギヤスケル作品は伝えている。本稿ではこの点について、群衆化による人間性の喪失と破壊行動（労働者群衆）、死者の群衆による生者の群衆の支配（二重群衆）、そしてタルド的公衆による貴族支配への抵抗の示唆を論点とし、ギヤスケルが群衆の開放化と、開かれた群衆への変容を支持していると指摘してきた。そしてそのプロセスにおいて、女性登場人物の言葉や行動に重要な役割を与えるのが、ギヤスケル作品の特徴となっている。

群衆の問題は公的領域の問題だが、ギヤスケル作品では、公的領域での問題がいかに私的領域の問題に影響を与えるか、またその逆もしかりという観点から、女性による問題解決を試みたと考えられる。公的領域の群衆の問題であれ、それは渦中にある男性たちだけの問題にとどまらず、その後始末を引き受けねばならない女性たちの問題でもある。本稿で言及した『メアリ・バートン』、『クランフォード』、『妻たちと娘たち』ではいずれも、女性たちの考えや価値観を基盤として、女性たちが（意識するかしないかはともかく）率先して群衆化回避の手段を講じている点が際立つ。ギヤスケルは、ジェンダーによる公的領域と私的領域の分断を声高に批判するわけではないが、両者は決して自己完結する場ではなく、相互依存的な関係にあることを作品の中で強調している。それゆえ群衆の開放化は、従前の体制を見直し、再構築し、変化を受け入れる場へと変容するために不可欠な作業である。ギヤスケルは、そのプロセスにおいて触媒となるのが、当時

の社会システムの中心から外されていた女性登場人物であることを作品の中で強調しているのである。

注

本稿は第29回日本ギaskell協会大会（2017年9月30日、於熊本大学）におけるシンポジウム「群衆との対峙——ヴィクトリア朝の小説における都市の風景」での発表に基づき、加筆・修正を行ったものである。

- 1 「群衆」とも表記するが、本稿では「群衆」に統一する。
- 2 本稿におけるギaskell作品の引用はすべて *The Works of Elizabeth Gaskell*. 10 vols. を使用し、引用の際には（ ）内に巻数とページ数のみを記載する。

引用文献

- Banks, J. A., and Olive Banks. *Feminism and Family Planning in Victorian England*. Liverpool UP, 1965.
- Canetti, Elias. *Crowds and Power*. Translated by Carol Stewart. Farrar, Straus and Giroux, 1984.
- Croskery, Margaret Case. “Mothers without Children, Unity without Plot: *Cranford’s* Radical Charm.” *NCL*, vol. 52, no. 2, Sept. 1997, pp. 198-220.
- Elliott, Dorice Williams. “Class Act: Servants and Mistress in the Works of Elizabeth Gaskell.” *Elizabeth Gaskell, Victorian Culture, and the Art of Fiction: Original Essays for the Bicentenary*, edited by Sandro Jung, Academia, 2010, pp. 113-29.
- Ellis, Sarah Stickney. *Education of the Heart: Women’s Best Work*. Vol. 6 of *Female Education Considered: Nineteenth-Century Britain*, edited by Setsuko Kagawa, Thoemmes, 2002.
- Gaskell, Elizabeth. *The Works of Elizabeth Gaskell*. Edited by Joanne Shattock, et al., Pickering & Chatto, 2005-06. 10 vols.
- Gillooly, Eileen. “Humor as Daughterly Defense in *Cranford*.” *ELH*, vol. 59, 1992, pp. 883-910.
- Inglis, Katherine. “Unimagined Community and Disease in *Ruth*.” *Place and Progress*

- in the Works of Elizabeth Gaskell*, edited by Lesa Scholl, Emily Morris and Sarina Gruver Moore, Ashgate, 2015, pp. 67-82.
- Johnson, Barbara. "My Mother/My Self." *Frankenstein*, by Mary Shelley, edited by Paul Hunter, Norton, 1996, pp. 241-51.
- Kucich, John. *The Power of Lies: Transgression in Victorian Fiction*. Cornell UP, 1994.
- Langland, Elizabeth. "Women's Writing and the Domestic Sphere." *Women and Literature in Britain 1800-1900*, edited by Joanne Shattock, Cambridge UP, 2001, pp. 119-41.
- Matus, Jill L., "Mary Barton and North and South." *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*, edited by Jill L. Matus, Cambridge UP, 2007, pp. 27-45.
- Plotz, John. *The Crowd: British Literature and Public Politics*. U of California P, 2000.
- 要田圭治「群衆の内と外——ギヤスケル、ハーディ、そしてモンスター」『ギヤスケル小説の旅』朝日千尺編、鳳書房、2002年、139-60頁。
- タルド、ガブリエル『世論と群衆』稲葉三千男訳、未來社、1989年。
- ル・ボン、ギュスターヴ『群衆心理』櫻井成夫訳、講談社学術文庫、1996年。

From the Closed Crowd to the Open Crowd: Women's Response to the Crowd in Gaskell's Works

Masako KIMURA

This paper focuses on how women in Elizabeth Gaskell's works face and respond to the "crowd," the members of which often tend to riot. Due to Victorian social conventions, women were not allowed to commit themselves to issues in the public sphere, which were considered to belong to the male domain. However, Gaskell as a novelist is not left in the dark about the impact of the crowd on society; instead, she tries to take some measures against people's tendency to riot. She exploits her female characters' power and influence to avoid a deterioration of the situation.

Referring to the argument of three major theorists, Gustave Le Bon, Elias Canetti, and Jean Gabriel Tarde, this paper discusses three types of crowds: the crowd of laborers in *Mary Barton* (1848), the double crowd in *Cranford* (1851-53), and the public, which Tarde regards as voters, in *Wives and Daughters* (1864-66). Every case of the crowd's multiplication poses a threat to the present social system; in particular, the "closed crowd" (Canetti's terminology) can lead its people toward self-deception and subversive activities. Gaskell's suggestion is that a crowd should be open to a diversity of people beyond social classes or cash-nexus. She attaches importance to cooperation, which can prevent hostilities.

In reality, Gaskell's proposal could not be adapted to capitalism in the nineteenth century, and nobody can stop the increase of the crowd as urban development and communication grows. However, her insight is worthy of note because it is her female characters that contribute toward the support of the social system from which they are ironically excluded.